

# 「新約聖書が完璧に読めること」 ——18世紀イギリスにおける初等リーディング教育の 達成目標

鶴 見 良 次

キリスト教知識普及協会（The Society for Promoting Christian Knowledge. 以下 SPCK と略記）のチャリティ・スクールの教育目的は、その基金申込書（1699年）<sup>1)</sup>の設立趣意にあるように、「貧しい子供たちに英国教会が唱え説くキリスト教の知識と実践の教育を行う」ことにあった。そのために何よりも重視されたのが、生徒に教理問答を反復して暗唱させ、その内容を理解させることであった。SPCK の指導要領とも言えるジェイムズ・トールボットの『キリスト教徒の教師』（1707）<sup>2)</sup>によれば、教理問答を学んだあとは、生徒は祈祷書の日課、使徒信条、祈祷と応唱、讃美歌、詩篇などを経て、新約聖書へと進む。まずマタイによる福音書の山上の垂訓、奇跡物語、たとえ話などが学ばれる。旧約聖書は基礎的な読み方を習得した生徒によって、卒業の時期まで読まれた。（92-95 頁）

その一方で、趣意には、教師の努めとして「正しく上手に読むのに必要な語の綴り方、分節のし方、句読法など」を教えることが義務づけられている。聖書の理解はチャリティ・スクールにおける宗教教育の終極的な目的であると同時に、リーディング教育の達成目標でもあった。聖書は、言わば初等段階における最上級のリーディングのテキストでもあったのである。

教理問答書と並んで聖書がチャリティ・スクールのおもな教材であったことは教育史のなかでしばしば言及される。それらの学校の主たる目的が宗教と道徳の教育にあったことから、それは当然のこととして述べられることが多い。また17世紀半ば以降、多くの子供向けの聖書物語が出版されたが、18世紀に入るまでは、それら以外に児童書と呼べるものはほとんどなかったともされる。<sup>3)</sup>しかし、聖書が実際にリーディング

の教材として、どの程度、どのように用いられたかについての詳しい研究は見られない。本稿では、チャリティ・スクールにおける宗教教育の教材としての聖書が、同時に綴字およびリーディング教育の教材としてどのような教授法に基づいて編集され、用いられたのかを、またそれらの書によってどのような指導が行われたかを考察する。

## I

SPCKの学校設立趣意には、教師の務めとして、教理問答を教材として生徒にキリスト教を学ばせること、またそれに際してリチャード・アリストリー著とされる『人の務め』(1658)<sup>4)</sup>などの参考書を用いて解説することは明記されているが、聖書そのものを教材とすることについての言及はない。しかしチャリティ・スクールにおいて聖書が読まれたことは言うまでもない。『イギリスとアイルランドのチャリティ・スクールに関する報告』第12版(1713)<sup>5)</sup>には、入学に際して生徒の両親が負う義務として、特に両親が読み方に疎い場合には、自分たちのためにも、家庭で子供に旧約・新約聖書を読ませるべし、という項目がある。

1699年にロンドンのソーホーに創立したセント・アンズ校の初年度経理報告書には、購入品目として、祈祷書の解説書や綴字教科書などとともに、聖書50冊が計上されている。同校の創立当初の入学者数が40であることを考えれば、生徒一人一人に一冊ずつ聖書を持たせることが前提になっていたことがわかる。創立の翌年1月の議事録によれば、生徒の入学を前に、教師たちが生徒の衣服やさまざまな文房具、備品などとともに多くの聖書を購入している。同じくロンドンのホースリー・ダウン校の1728年の年次報告書には、「男子生徒たちには毎年衣服が支給され、聖書その他の本が与えられて、読み書き、計算の教育が行われている」と書かれている。また、非国教のグラヴェル・レイン校の支援者に1730年元旦に行われた説教の冊子に付された学校説明文にも「聖書、新約聖書、教理問答」が子供たちに与えられている旨が記されている。<sup>6)</sup>

さて、チャリティ・スクールの教材としての聖書について考察するうえで必要なのは、当時の子供にとっての聖書という読み物の在り方やそれについての人々の考え方を知っておくことである。17世紀末は、貧しい子供たちのための学校建設の必要が認識されて実際に盛んに建設され

るようになるまでの、いわば準備期間にあたる。実はこの時期は、子供用の聖書が精力的に出版されるようになった時期であり、また子供のための普遍的な読み物としての聖書とその読ませ方についての関心が高まりを見せた時代でもあった。

聖書を素材とした子供向けの読み物は、17世紀には教理問答書をはじめ、物語のあらすじの冊子、ラテン語英語対訳版、綴字法やリーディング教科書中のテキストとしてなど、さまざまな形で見られた。また、おもに中流家庭向けに編集された大版（フォリオ版）の新約聖書（1688年）と旧約聖書（1690年）の2巻本がロンドンの出版者リチャード・ブルムによって出された。『子供のための聖書』の著者ルース・ボティグハイマーによれば、大幅な編集が行われ、道徳的教えを強調した同書をはじめとする家庭向け聖書は、児童向けの聖書物語集にも大きな影響を与えた。ただし、イギリスで最初に出された散文の本格的な子供用聖書物語と言えるものは1690年に刊行された『創世記物語』である。これは、ニコラ・フォンテーヌのフランスで最初の児童聖書物語集（1670）から創世記の末尾を忠実に英訳したものであった。同じ時期に、娯楽のための児童書の先駆的な出版者ナサニエル・クラウチが韻文の『素晴らしい40の聖書物語』（1691年）を出版し、さらにその続編を1720年に出した。旧約・新約聖書中のすべての物語を子供向けに語り直した最初のものは、次節で詳しく紹介するジョーゼフ・ハザッド刊の『簡約 旧約・新約聖書物語』（1726）であった。120の美しい銅版挿絵入りで人気を得て、刊行後16年間に少なくとも4回増刷され、1750年頃まで他の版元からも出された。<sup>7)</sup>

スコット・マンデルプロットは「イングランド近代初期における聖書と教訓的文芸」と題された論文で、17世紀後半には多くの教育者や聖職者が聖書が子供に与える感動の重要性を指摘していることを論じている。たとえばロンドンのロースベリー・ガーデン・グラマー・スクール教師チャールズ・フルは『学校教育方法論』（1660）の初等教育に関する部分で、子供が読み方の入門を果たし、初歩的なリーディングのテキストがなんとか読めるようになったなら、聖書のなかでも創世記など子供たちが喜びそうな部分を読ませることを勧めている。後にチチェスターおよびイーリーの主教を務めることとなるサイモン・パトリックは、1680年に出版した教育論のなかで、幼い者たちが旧約聖書を楽しんで読

んでいるとして、旧約聖書の物語はキリスト教精神の基本を伝えるのに最適のものであると論じた。また同時期にリチャード・ルーカスはしつけ指南書の中で、親が子供のために聖書のうちの難しい教条的な部分は避け、「わかりやすく、役に立つ章を」、また「感動的で、心に訴えかける」部分を選んで読ませるようにと書いている。<sup>8)</sup>

ジョン・ロックも、こうした子供の読み物としての聖書の流行のなかで、子供に聖書を読ませる際の適切な方法についてのはっきりとした考え方を示した一人である。ボティグハイマーは、ロックはブロムの聖書物語集、あるいは『創世記物語』を念頭において論じているのであろうと推察している。<sup>9)</sup>『教育に関する考察』(1693)の第20章「学習と勉強について」で、聖書をやみくもにそのまま章を追って子供に読ませることの愚について論じ、次のように述べた。

As for the *Bible*, which Children are usually employ'd in, to exercise and improve their Talent *in Reading*, I think, the promiscuous reading of it through, by Chapters, as they lie in order, is so far from being of any Advantage to Children, either for the perfecting their *Reading*, or principling their Religion, that perhaps a worse could not be found. For what Pleasure or Incouragement can it be to a Child to exercise himself in reading those Parts of a Book, where he understands nothing? And how little are the Law of *Moses*, the Song of *Solomon*, the Prophecies in the Old, and the Epistles and *Apocalypse* in the New Testament, suited to a Child's Capacity? And though the History of the Evangelists, and the Acts, have something easier; yet taken altogether, it is very disproportionate to the understanding of Childhood.<sup>10)</sup>

次節でロックは、「聖書には、子供に読ませるために与えるのが至当な部分がある」として、「ヨセフとその兄弟たちの物語、ダビデとゴリアテの物語、ダビデとヨナタンの物語など」を挙げ、さらに「平明な道德律」も「読み方と教訓の双方にしばしば利用でき」と言う。<sup>11)</sup>ロックも聖書の教材としての妥当性は認めている。ただし、聖書を宗教やリーディングの教材として用いる際には、そのための適切な指導法が必要で

あるとしているのである。

子供に読ませるべき宗教とリーディングの教材としての聖書とその読ませ方についてのこのような関心の高まりのなかで、SPCKなどのチャリティ・スクール建設の機運も高まっていったと言うことができよう。本来、教理問答学校（catechetical school）とも呼ばれたこれらの学校における教理問答に次ぐ教材が聖書であったのは、民衆児童に宗教道徳を教えることを目的にしていたそれらの学校にとっては当然であったとも言える。しかしそれとともに、これらの学校は子供にリーディングの技能を身につけさせることをも目的としていた。その意味では、教材としての聖書の指導においては、宗教教育の指導法と英語教育の教授法の双方の工夫が教師に求められていたことになる。それでは、それらの工夫を反映した聖書の読み方とはいったいどのようなものであったのだろうか。そもそも、子供たちが手にした聖書は、いわゆる大人が読むのと同じものであったのか、あるいは英語の教授法にのっとった教科書版とも言うべきものが流布していたのだろうか。

ページ数も多く重たい書物である正規の聖書は、教科書としては生徒たちにとっては扱いづらいものであった。教会での礼拝に参加する際のためから、祈祷書や讃美歌集と合冊になっている場合はなおさらであった。そのため、SPCKは聖書の物語をダイジェストしたものなどの学校用小冊子を数多く出版した。学校経営者の多くはSPCKのメンバーであったため、これらの書を原価で購入することができた。<sup>12)</sup>非国教系の学校でも独自に編集したものを版元で刷らせて用いた。1719年のSPCKのチャリティ・スクール用図書目録<sup>13)</sup>には、生徒用に縮約して編集した教理問答書、祈祷書、讃美歌集などとともに『簡約聖書物語』（1715年、あるいはそれ以前）<sup>14)</sup>が見られる。これらの縮約版の聖書物語では、語彙や文体が、読み方を学び始めて間もない幼い子供にも理解しやすいものに改められるとともに、多くの場合宗教的教訓が強調されている。次節では、それらの学校用ないし子供向けの聖書物語集について論じる。

## II

『簡約聖書物語』はSPCKが発足後早い段階でチャリティ・スクール用図書の目録に載せた聖書物語集である。（図1）著者はスイスの改革派

牧師ジャン・フレデリック・オステルヴァルド(1663-1747)である。そのフランス語教理問答によって同国のフランス語地域の子供たちは聖書入門を果たした。18世紀になると問答形式ではなく物語形式に改められた版が流布するようになり、同時に各国で翻訳されるようになった。<sup>15)</sup>SPCKのものはその英語版とすることができる。9章23ページに刊行目録1ページを加えた小冊子であり、最も小さく安価な聖書物語の一つである。各章では、それぞれ、天地創造から大洪水まで、アブラハム契約、エジプトへの逃避、ソロモンの神殿、バビロニア捕囚、キリス

ト誕生まで、キリストの誕生・死・復活・昇天、使徒の教えとキリスト教の確立、簡約キリスト教理が語られる。第1章の第1パラグラフは以下のようなものである。出典を示す2つの注が見られる。

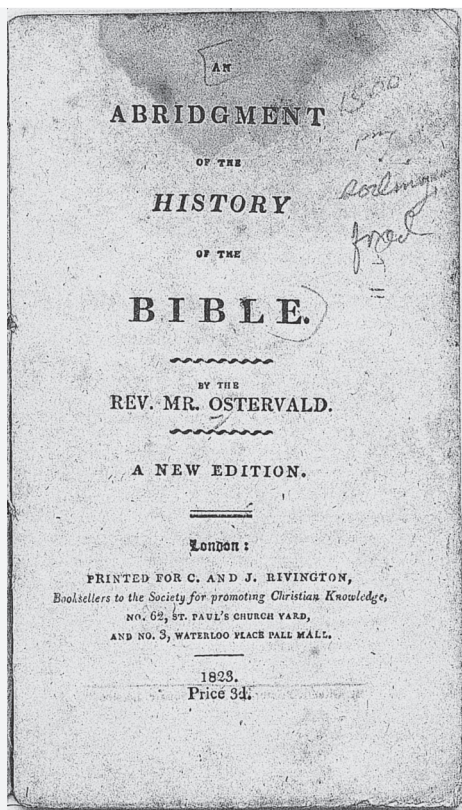


図1 『簡約聖書物語』(1823年版)表紙

THE World was (a) created about Four Thousand Years before the Birth of Jesus Christ. In six Days GOD made all the Creatures that are therein : and on the sixth Day he created *Adam*, who was the first Man. He made him after his own Image, and gave him Dominion over the rest of the Creatures. *Adam* after his Creation (b) was put into the terrestrial Paradise, otherwise called the Garden of *Eden*, with

*Eve his Wife, who was formed out of one of his Ribs : And they would have lived happy in that Place, if they had continued in their Innocence, and kept the Law that God had given them.*

(a) Gen. i.

(b) Gen. ii.

(pp. 3-4)

このあと、樂園追放から大洪水の到来までが物語られる。この書き出しを見るだけでも、現代にいたるまで、キリスト教徒の子供たちが最初に読み、暗記する聖書の物語の原型がこうしたテキストにあったことがわかる。

旧約・新約聖書を二十数ページにダイジェストするというはなれ技は、物語の顛末とプロットのはっきりした各章の展開によって可能となっている。語句は、聖書に特有のもの以外は、十分に平易である。文は多くが20語から40行程度の長さで、概して単純な構文である。長い場合は、条件節、関係代名詞節、分詞構文などによるものだが、決して複雑なものではない。句読法も十分に練られており、幼い読者の理解の助けとなっている。教理問答から散文物語に書き改められたという来歴が示すように、文体は簡潔でわかりやすく、暗唱に適しているのである。教条的内容を幼い子供たちに学ばせ、理解させ、記憶させることを目的とするチャリティ・スクールで、教理問答の次に学ぶべき教材として最適なものであったと言える。プロットの単純化は、子供たちに道徳的教訓を端的に示す効果を持つ。たとえば、先の引用末尾のアダムとイヴが「無垢のままに、神さまのいましめを守っていたなら、そこでずっと幸せに暮らせたことでしょう」という文や、あとの行の「地上は罪に満ち、墮落があまりにもひどくなり、広まったため、神さまは大洪水を起こしました」(5頁)といった部分に込められた仮定法や相関接続詞を用いた単純な因果律とも言うべきものによって、子供は道徳を植え付けられる。巻末には「こうしたキリスト教の教えを常に守り、愛し、それに従って暮らすこと」が「私たちの務め」(23頁)であるとする子供への教訓が半ページ分付されている。このような小さな冊子体の聖書物語は18世紀を通じて数多く出版され、読まれた。各校で用いられたとされる聖書物語のうちの、最も初歩的なものがオステルヴァルドのものの流れを汲んだものである。

すでに前節で言及したように、イギリスで初めてすべての聖書中の物

語を子供向けに書き直したものが『簡約 旧約・新約聖書物語』であった。序言には、高価なブロムの版などと違い値段も両親の負担にならないものであり、豊富な銅版挿絵が添えられており、あまり教育を受けていない者たちや子供たちに、また学校での使用にふさわしいものであると宣伝されている。同書は学校でよりもむしろ家庭で多く読まれたものと思われる。しかし、一般にリーディングが聖書を教材に学ばれたと言う場合の「聖書」とは、先に紹介した最も初歩的なものを別にすれば、少なくとも初等段階では同書のような児童書を指すと考えるべきであろう。

1 ページに2つの章が収められ、対面ページにそれぞれの挿絵が各1枚ずつ配されている。挿絵は縦に2枚並べられており、下段の絵の下に聖書の出典が示されている。第1章「天地創造」は次のように語られる。

GOD having, out of a confused and obscure *Chaos*, created the Heavens, the Earth, and the Sea; the Fishes, the Birds of the Air, the Cattle, and every creeping Thing, He last of all, was pleased to form *Man*, to be the Lord of all these, *out of the Dust of the Earth*, and *breathed into his Nostrils the Breath of Life*. And that he might not be without a Companion, or *Help meet for him*, he cast the Man into a deep Sleep, and from one of his Ribs, formed Woman, and brought her to the Man, who received her as *Bone of his Bone*, and *Flesh of his Flesh*, and called her *Woman*, to signify her Relation to him.

創世記第1章をまとめた部分である。オステルヴァルドの版よりやや長めである。また聖書そのものの細部をより意識して書かれている。オステルヴァルドのものと同様に因果律は子供向けに明確である。エデンの園の知恵の実の件は「人が造り主に従順であるか、またお導きの<sup>くだり</sup>のありがたさをわかっているかを試すものでした」と説明されている。表現は必ずしも複雑ではないが、イヴの誕生についての論理的な説明などに、やや抽象性の高い表現を含んでいる。用いられている語のなかには生徒の語彙を越えると思われるものも見られる。聖書中の語や表現をイタリック体にするのに対し、おもに物語の展開を理解するうえで注意すべき一般的な名詞群、および子供にとっての難語が頭文字の表記となっている。



ただし、こうした編集・製版上の工夫は必ずしもこのような児童書に限ったものではない。今日の出版物に比べれば18世紀にはイタリック体や頭文字が多用される傾向があった。聖書の記述そのものをところどころに引用しながら、全体を過不足なく縮めた代表的な子供用聖書物語である。

1763年に匿名の「英国教会の神学者」によって著された『子供の聖書』<sup>16)</sup>も、『簡約 旧約・新約聖書物語』に倣って、できるだけ多くの物語を子供たちに読ませることを目的としている。長い副題には同書の特徴が次のように示されている。

In which the several Passages of the Old and New Testament are laid down in a Method never before attempted ; being reduced to the tender Capacities of the little Readers, by a lively and striking Abstract, so as, under GOD, to make those excellent Books take such a firm Hold of their young Minds and Memories, and leave such Impressions there, both of Moral and Religious Virtue, as no Accidents of their future Lives will ever be able to blot out.

旧約・新約聖書のそれぞれの節を「幼い読者の未熟な能力に合わせて縮めた」という文言からは、同書が、聖書の内容を理解する力とリーディング能力とが並行して高まってゆくという考え方に基づいて編集されていることがわかる。この時期の聖書物語は、聖書の理解のための教材としてだけではなく、段階的に発達してゆくリーディングの力を養うための教材として意識されている。

これらの全190ページのうち、115ページまでが旧約聖書の物語、真ん中に教理問答と聖書讃歌1篇をはさんで、129ページ以降が新約聖書の物語である。エデンの園の知恵の木を背景に立つアダムとイヴを描いた、素朴だが十分に魅力的な木版画を伴った旧約聖書の冒頭は、「全能の神様がその偉大にして寛きみ心にて、無よりこの世をお造りになって、6千年ほどがたちました。神様はこの世をお造りになるに際し、そのお言葉以外のいかなる力もお使いになりませんでした」（1-2頁）である。言わば妖精物語的な語りだしになっている。語彙および文体は初級リーディングのレベルと言ってよい。第1章は大洪水の終わりまでが語られ

る。末尾の一節は、「こうしてノアは家族とともに箱舟を出て、神様に感謝し、それを讃えました。鳥たち、獣たちもみなノアとともに外に出ました。」(7頁)である。プロットや描写は簡略化され、物語の骨子がやさしい語彙と簡明な展開で示されている。副題に述べられている「生き生きとした、印象的な要約」とは、まさしくこうした妖精物語的な語りによるものである。最終章(23章)ダニエルの物語の末尾は次のようである。

[T]he king cast him into a lion's den, where he remained a whole night, to the great inward disquiet of *Darius*, who went the next morning, and there miraculously found him alive; so he honoured *Daniel*, who for many years lived the leading man of the kingdom; even to the reign of *Cyrus the Great*. (p. 115)

この部分は、ダニエル書の6章16節から28節までを数行にまとめたものである。今日の一般的な英文に比して、この時期は、挿入句や分詞構文などの多用によって、いわゆるピリオドからピリオドまでの間が長いことが多い。文の中途からのこの引用に先立つ数行を含めると、この文もかなり長い。しかし関係詞節や句読法の工夫によって語りの流れが作られており、物語の末尾として一気に読ませる工夫がなされている。新約聖書の部は全15章であり、キリストの生誕から、奇跡、ユダの裏切り、死、復活、そして各聖人の行いが、各章ごとに筋の展開中心に語られている。

18世紀に読み方を学ぶチャリティ・スクールの生徒やその他の子供のために出された多くの聖書物語には、やさしい語彙と音読しやすい簡潔な文体が用いられている。また妖精物語にも似た明快な映像を伴ったわかりやすい筋立ての、教訓のはっきりした読み物にするための編集の工夫が認められる。それらによって幼い子供たちに旧約・新約聖書の教条的な内容を理解させ、記憶させることを目指した。聖書物語は内容的には明らかに宗教・道徳の教材である。しかしそれと同時に、子供に物語を読むことの楽しさを覚えさせながら、読み方の実践的な練習をさせるためのリーディングの素材でもあったのである。

### III

教科書版あるいは子供用の聖書物語集そのもの以外に、第I節で触れたように、綴字法やリーディングの入門用の教科書に、祈祷や詩篇などとともに聖書物語が教材として収められているものも多かった。『英語教育』のイアン・マイケルは、「もっぱら教義的な教材を用いた綴字教科書は1760年代までずっと出され続けていた」と書いている。たとえば、スタンフォードのチャリティ・スクール教師ウィリアム・ターナーがSPCKのために1710年に出版した『英語の綴字と読み方』の副題は「子供のための適切で有益な教え、祈祷、詩篇、讃美歌付き」である。また、コカマスのグラマー・スクール教師ダニエル・フィッシャーは『子供のキリスト教教育』（1750年、あるいはそれ以前）の序文で、「子供は理解できないものを修得することはできない」とし、「聖書を読むこと自体を退屈でうんざりするものにしてしまうような、長たらしくわかりにくいもの」を引用文から除いたと記している。いずれにしても、チャリティ・スクールが積極的に建設された17世紀末から18世紀にかけての時期において、聖書物語をはじめとする教条的な文章が綴字・リーディング教育の基本的な教材であったことは明かである。ただし、マイケルが指摘するように、「編纂者がそうした教材を選択した動機が道徳的、宗教的訓育だけにあったと考えることはできない。」マイケルに倣って、それらのテキストが生徒のリーディング力を養い、彼らに豊富な言語的、文学的体験を与えるという教育的意図によって選択されていると考えるべきであろう。<sup>17)</sup>これらの教科書からは、聖書や聖書物語がリーディングの授業において実際にどのように教えられたかを知ることができる。

レディングのセント・メアリー教会主任代行司祭フランシス・フォックスの『綴字と読み方入門』（1754年、あるいはそれ以前）<sup>18)</sup>はSPCKのチャリティ・スクール用に編纂されたそうした教科書の例である。アルファベットや綴字の基礎から学び、聖書物語や祈祷を教材として読み方を学ぶものである。18世紀前半に出版されたあと、少なくとも1818年までに21版<sup>19)</sup>が出されており、最もよく用いられたものの一つである。2部構成で合計83ページから成る。序言のあとに魅力的な表徴を付したピクチャー・アルファベット(図2)が見られ、それに続けてローマン

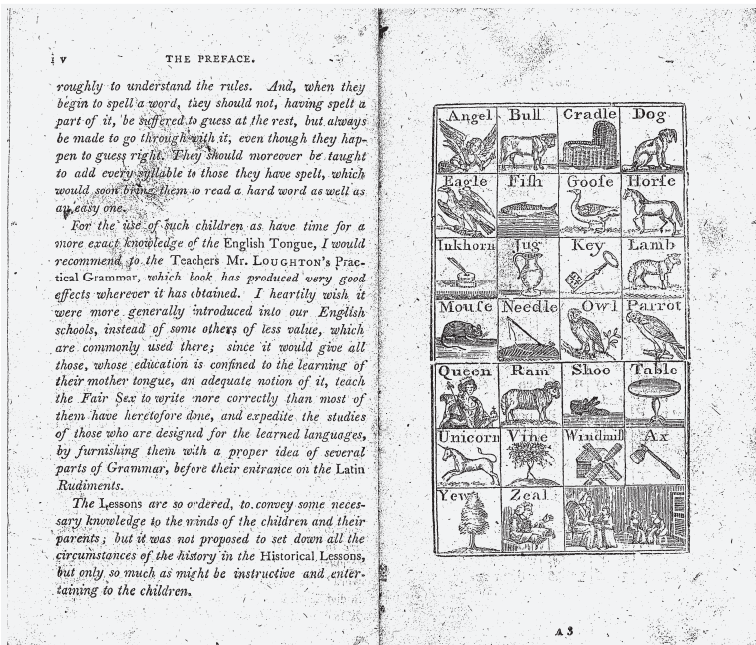


図2 フォックス『綴字と読み方入門』（1818年版）序言最終ページとピクチャー・アルファベット

体、イタリック体、イングリッシュ体、および音から成るアルファベット表が付けられている。まさしく初めて読み方を学ぶ生徒を対象に作られたものである。

第1部の第1課から6課（7-9頁）までは短音節の一覧、7課から13課（9-11頁）までは短音節語の一覧があり、それに続けて、14課から23課（11-15頁）までは「世界」「魂」「食生活・衣服」「生き物」「家屋」「度量衡」など、ジャンル別に整理された短音節語が列挙されている。たとえば、19課には「這う生き物」として蟻、コブラ、甲虫 (ant, asp, bug) など、「鳥」としてこうもり、鳩、鶴 (bat, dove, crane) などが挙げられるという具合である。ところが24課からは、突然、2音節語、3音節語を含む文によってパラグラフ構成された旧約聖書の物語が始まる。24課はアダムとイヴの挿絵を伴った4パラグラフの天地創造の物語である。聖書物語は42課まで続く。その後は、43課から49課までが教理問答、50課から55課までがアリストリーの『人の務め』に基づく夫、

妻、親、子供、主人、奉公人の果たすべき務めについての教えである。56課は言葉を慎み、嘘をつかないことについての聖書中の教えである。その後は格言集が続く。57課から63課まではイタリア、スペイン、フランス、イングランド、ウェールズに伝わる、64課は聖書などの、65課はオランダの法学者グロティウスら歴史上の人物の、66課はフィリップ・シドニー卿とトマス・モアの格言がそれぞれ集められている。

58ページからの第2部では、初歩的な英語学的知識が問答法によって学ばれる。第1課から10課までがアルファベット＝綴字、分節、句読法、校正法、11、12課が一般的な略語、13課は聖書中に用いられる略語、14課は大文字およびローマ数字の使い方、15課は原始語（派生語の基になる語）と派生語、単一語と複合語の解説である。たとえば分節を扱う6課の問答は次のようである。

Q. TO which vowel does *x* go?

A. *x* always goes to the vowel before it ; as in *lux-u-ry*, *max-im*, *ax-i-om*, *prox-y*, &c.

Q. What if a consonant be doubled?

A. If a consonant be doubled, it must be parted ; as in *fol-ly*, *com-mon*, *din-ner*, *let-ter*, &c. (P. 61)

巻末には合計14ページの祈祷集が付されている。朝、昼、晩の祈り、日曜日の祈り、病人のいる家での祈り、家での子供の祈り、初めて教会の礼拝に出る際の祈り、食前食後の感謝の祈り、そして祝祭日の特祷である。

以上のような構成を見れば、同書が、アルファベットや綴字法から旧約聖書の読解まで、かなり幅の広い教育内容を含んだ、リーディングのための総合教材であることがわかる。一方で、学校でだけでなく、家庭や教会で用いる祈祷集が付されていることなどを考えれば、教科書であると同時に、信仰実践のための実用的な書物でもあることがわかる。この時代の英語教育と宗教教育との相互的、相乗的、あるいは補完的な関係をよく示す教科書であると言える。それでは、そのなかで旧約聖書は、特にリーディング教育にとってどのような役割を果たしているのだろうか。

概して17、18世紀のリーディング教科書では、リーディングそのものの意味については説明されていない。フォックスの書のように、アルファベット＝綴字から分節へと進んだ後は、直接、教理問答書や聖書物語、その他のテキストを読み始めるのである。旧約聖書が最後に学ばれるとするトールボットのカリキュラムとは異なり、フォックスではアルファベットの次に旧約聖書の物語があり、その後に教理問答が続いている。いずれにせよ、少なくともイングランドの子供たちにとっての英語リーディングは、すなわち綴字を正しく発音する技能である。したがって、最初の達成目標は音読を間違わないように行うことである。聖書のテキスト中のむずかしい言葉や観念については、教師が適宜、聖書の語彙集や教理問答書などを参考に解説を加えた。そうしたリーディング教育の基本的なかたちは、16世紀以来、ほとんど変更されていなかった。<sup>20)</sup>

すでにチャリティ・スクールの設立以前にも、たとえばジョン・エヴァンズの『楽しく役に立つ綴字法』(1621)の序言にはすでに「本書で英語の語彙を学び理解するだけで、聖書をはじめどんな本でも容易に読めるようになる」という言葉が見られる。チャリティ・スクールに学んだ者たちの証言からも、相当幼いうちから聖書を読まされていたことがうかがわれる。1732年生まれのメソジスト、ニコラス・マナーズの自伝には、「とても熱心な先生だったので、なかには6歳の子もいたが、私たちは聖書を読むことができた」という記述がある。また同じく初期メソジストで49年生まれのジェームズ・ロジャーズは「幼いうちから学校にやられ、子供の頃から聖書の読み方を習った」と記している。<sup>21)</sup>さらに、国教会福音派の教訓作家で、チャリティ・スクールや日曜学校の設立運動に積極的に携わったセアラ・トリマーは『チャリティ・スクール児童の教育についての省察』(1792)で、読書教育について次のように書いている。

The children, in most Charity Schools, are at first taught to read in a Spelling Book, the lessons of which consist chiefly of sentences collected from the scriptures, most of them in figurative language ; as soon as they can read and spell a little, they are put into the New Testament, and when they have read this from beginning to end, they

proceed to the Old Testament, and go through that in the same manner, without regard to any thing farther than improvement in the *art of reading*.<sup>22)</sup>

これは、設立当初のチャリティ・スクールでは口頭での宗教的な指導に重きが置かれていたのに対し、昨今では読み方の機械的練習に終始している感があるとする批判の文脈で述べられたものである。チャリティ・スクールのおよそ100年間の歴史における教育の変化についての証言としてきわめて興味深い。これらの学校での教育の硬直性などについての批判の起源が、実はそこでの教育の本質ではなく変質にあったことがわかるからである。いずれにせよ、綴字の学習からただちに聖書へとという進み方については、この段階でも変わっていなかったのである。

『アルファベットを気にせずに』の著者ハンター・ディアックは、ブリテンおよび外国学校協会校に関する勅任視学官の1864年の報告を根拠に、イギリスにおける英語リーディング教育は19世紀半ばにいたるまで、もっぱら文字と綴字を教えるアルファベット法によっており、その教材は常に欽定訳聖書であったと書いている。なが年にわたって行われてきたのは「アルファベットからいきなり聖書へ」と進む学習法であったという。<sup>23)</sup>ここで、フォックスの教科書に戻ってその構成を見れば、確かに、見事に「アルファベットからいきなり聖書へ」という進め方になっている。しかし、ディアックの言葉にはもちろん誇張が含まれている。チャリティ・スクールの生徒がまずアルファベットの文字を覚えることから始め、アルファベット＝綴字教授法 (alphabetic-spelling method) によって語の正しい綴り方と句読法を学んだこと、またその教材がもっぱら聖書をはじめとする宗教的な内容のものであったことは間違いない。ただし、ここで言う聖書には、大人向けの聖書そのものだけでなく、初学者向けにやさしい語彙や文体で語り直したダイジェスト版の聖書物語なども含まれていると理解すべきである。多くの場合、フォックスの書のように、同じ本に子供向けの教理問答、祈祷、あるいは詩篇や讃美歌なども併載されていた。次節でも触れるように、チャリティ・スクールでは一般に4、5歳から13、14歳までの生徒を学年別のコースに分けて教育していた。リーディング能力の習熟度にしたがって、難易度の低いものから高いものへと、最終的には正規の聖書へと教材を変えながら、

何らかのグレード別の指導が行われたと考えるべきなのである。それでは、フォックスのもののようなさまざまな内容を含む教科書は、実際にどのような指導法のもとで使用されたのだろうか。

フォックスは序言の冒頭で、同書のリーディング学習法はあるチャリティ・スクールですでに実践され、成功したものであるという。そのためその学習法は「出版されて、子供たち一人一人の手にわたるのにふさわしい」ものであり、さらに、「1校で有益であったものであれば、他校でも同様であろう」とも述べている。それに続けて、同書の指導法を次のように述べている。「子供たちが第1部のはじめの部分で文字を覚え、音節と短音節語を学んだなら、ただちにあとの各課を読ませることをお勧めする。」あとの各課とは、先に触れたように旧約聖書の物語以下のことである。このことから、たしかに基本のアルファベット＝綴字指導のあとすぐに聖書が読まれていることがわかる。ただし、それと並行して、綴字と語の分節の規則についての指導をも適宜行うようにとの次のような指示が続いている。

And while this is doing, it is proposed that the judicious instructor should, as the children are capable, sometimes teach them the *Rules* for spelling, and dividing words into syllables, which are in the *second Part*. These are contained in a few pages, and therefore may be easily committed to memory. And, in reading, the children are supposed to be daily and constantly taught the use and application of those rules; which is the reason why the words in the *Lessons* are not divided into syllables, as they commonly are in books of this nature. The children should be frequently asked, *By what rule they speak such a word? Why they stop at such a vowel or consonant, in dividing it into syllables, rather than at such a one?* (p. iii) (原文はイタリック、強調がローマ  
ン)

この序言で注目すべきは、聖書物語が、宗教教育の教材としてよりもリーディング力をつけるための教材として意識されていることである。そのため、編者は教科書のどの部分をどのように用いて綴字や分節の学習をさせるかについての細かい指示を教師に与えている。さらに、多く



の初等読本に見られるような、文中の単語を分節する編集がなされていないことについて、生徒に文章を読みながら綴字や分節の規則を学ばせるためだと説明している。教師は常に生徒に語の発音や分節についての問いを出し、答えさせるべしともしている。この序言は、短いながらも、教師の指導法および生徒の学習法を提示したものであると言える。聖書物語は、ここでは宗教教育の教材であるというよりも、内容重視のリーディングの教材となっているのである。

ところで、こうした指導法は、内容の配列をはじめとするこの教科書の編集に実際に反映しているのだろうか。すでに紹介したように、短音節語の学習のための第23課までのあとに、複数音節の語を含む聖書物語が始まる。また第2部にアルファベット、綴字、分節についての問答形式の解説が見られる。仮にこの教科書の順に学習してゆくとすれば、綴字や分節の段階的な理解には無理が生じるように見える。同書は、このままの順で指導ないし学習が行われるようには編集されていないのである。教師が序言での指示を参考にしながらリーディングの技能を教えるための教材集であると言うべきであろう。序言の内容があくまでも教師に向けて基本的な指導上のアドバイスを与えるものであることを考えても、この本は、それぞれの教師が教える順序などを工夫して指導を行うことを前提としたものである。したがって、これは聖書物語集ではなく、あくまでも学校用のリーディング教科書である。しかし一方、カリキュラムに沿って順に指導内容を定めた今日の教科書とも異なった性格のものであった。チャリティ・スクールの生徒のリーディング教材として最もふさわしいと考えられた聖書物語を提示することが主眼であり、生徒がそれを十分に読みこなせるようになることを目的として、それに必要な英語の知識を第2部にまとめたもののなのである。

同書は、宗教教育のための素材としての聖書物語集であると同時に、子供のリーディング力の段階的な発展を目指すアルファベット＝綴字教授法による教科書である。その意味で、宗教教育からリーディング教育が自立する過程を示すものでもあると言える。特にその序言からは、初歩から中級段階に進むまでのこの時代の初等リーディング教育の基本的な指導法を見てとることができる。この書のように綴字法と聖書のテキストが併載されたものに限らず、第II節で紹介した聖書物語を教科書として用いる授業でも、ほぼ同じ指導法、すなわちアルファベット＝綴

字教授法にのっとったやり方でリーディングが教えられていたと考えられる。

#### IV

キリスト教精神に基づく道徳や勤勉さを身につけさせることを主たる目的としていたチャリティ・スクールにおいて、リーディング教育はどの程度の実力を生徒に与えていたのだろうか。数年の就学期間に生徒が習得した英語読解力については、用いられた教材からある程度推測することはできるとしても、教育目標として実際にどの程度のレベルが求められ、達成されたのかを知るのは必ずしも容易ではない。

チャリティ・スクールの就学期間には時代、地域、学校などによってばらつきが見られるが、およそ4、5歳から13歳前後までであった。セント・アンズ校では、後に幼児も受け入れるようになるが、創設時には10歳以下の子供は入学させなかった。級編成も必ずしも一律ではない。年齢別に9歳以下、9歳から13歳まで、13歳以上の3段階、あるいは教育内容によって、初級リーディング、新約聖書と詩篇、聖書全部とライティングの3段階であったとされる。学校を出て徒弟となる男子に加減乗除（算数）の4段階目が加わることもあった。<sup>24)</sup>新入学してくる9歳ほどの年齢の子供は、まず古くから民衆向けに多くの版が流布していた『教理問答付きABC』の伝統にのっとった小冊子によって、アルファベットの学習から始め、宗教的な内容とともに読み方の指導を受ける。<sup>25)</sup>その後、子供向けの祈祷書、讃美歌集、聖書物語などを用いた学習を経て、数年の在学期間を終える頃までに、正規の聖書の読解ができるようになったと考えられる。

SPCK 草創期の議事録などの資料によれば、協会創設者の一人ジャスティス・フックが創設直後の1700年に、またセント・オールバンズの大執事ウィリアム・スタッブズが1709年に、ロンドンのチャリティ・スクールに通う優秀な生徒をグラマー・スクールへ、さらには大学へと進学させようと試みたが、基金不足により断念したとされる。<sup>26)</sup>これらの資料からは、少なくとも一部の生徒には、グラマー・スクールの就学に十分な英語力、すなわち、ラテン語などの古典語・古典文学を学ぶための基礎としての英文法などの知識があったことが推察される。17世紀に

は、まず十分な母語の知識を身につけた上で古典語・古典文学を学ぶとする考え方が一般化していた。レスターのアシュビー＝ダ＝ラ＝ズーシュ校教師で『ルーデウス・リテラリウス』の著者ジョン・ブリンズリーは、「英語が読めるようになるまでは、グラマー・スクールに入学させるべきではない。すなわち、新約聖書が完璧に読め、文法を学んでいるか、それを学ぶに足る力を身につけていることが必要である」<sup>27)</sup>と書いている。フォックスの『綴字と読み方入門』の序言でも、上級の学問を目指す者たちがラテン語を学び始める前に「文法」のあらましを理解しておくためにも同書は役立つと謳われている。

これらのことからわかるのは、グラマー・スクールの就学に必要な英語力を測る基準が、新約聖書が完璧に読めるか否かにあったことである。旧約聖書が読めることは必ずしも求められていないことにも興味を引かれる。グラマー・スクールに受け入れるか否かは、その生徒の新約聖書の読解力によって判定されていたのである。イギリス近代の初等英語教育の達成目標は、少なくとも新約聖書の読解、望むべくは旧約聖書の読解であったと言うことができる。このことは、宗教・道徳教育と密接な関係にあった英語教育が、いく分かそれ自体で自立するようになったことを示している。逆に言えば、宗教教育は、聖書の読解が世俗的技能としての英語力一般の基準となることで、それ以前の時代に比べて世俗的性格を帯びようになっているのである。

## V

貧しい子供たちに教理問答と読み方の教育を行うことの必要が訴えられ、チャリティ・スクール建設が構想された17世紀末は、道徳が強調された家庭用の聖書に続いて、子供のための聖書物語集が盛んに刊行されるようになった時期でもあった。子供に最もふさわしい読み物としての聖書物語の流行に伴って、多くの教育者や宗教家はその適切な読ませ方についての発言を行うようになる。これらの現象は、実はそれぞれ別々のことではない。子供にふさわしい体裁と内容の聖書物語を編集するには、何らかの方法論が必要となる。順当と思われる方法論によって編集されたものが広範に流布し、それに基づいて、聖書の知識とリーディングの技能を身につけさせる適切な方法についての議論が行われるように

なる。聖書の正しい読ませ方についてなどの、子供のための宗教と言葉の教育についての一連の言説行為のなかから、チャリティ・スクールの構想が生まれ、実際にその建設が進められていったと言えるからである。

この時期のキリスト教徒にとって、子供にふさわしい読み物の筆頭は教理問答と聖書物語であった。これらをはじめとする聖書の内容に関連するさまざまな読み物に接することで子供のリテラシーが発展し、リテラシーの発展によって、18世紀半ばまでには、さらに多くの聖書物語が流布した。またそれと同時に、教条的な内容を伴わない、いわゆる娯楽本位の児童書が盛んに出版されるようになる。子供の読書世界の急激な広がりが見られたこの時期こそは、チャリティ・スクールの英語教育が相当程度に成果を示した時期であったとも言える。それらの学校で、教理問答と並んで最も広く用いられた教材としての聖書物語は、宗教教育の教材であったとともに、明らかにリーディング教育のためのものであった。そして、それらの読み方の学習を経て、生徒は正規の聖書の読解へと進んだのである。

SPCK や非国教系の組織によってその建設と運営が行われたチャリティ・スクールの宗教教育の最終的な目的が、聖書の内容の十分な理解と、そのうえでの信仰生活の充実や社会秩序への順応にあったことはよく知られる。しかし、一般に、貧しい子供たちに教理問答を機械的に反復させ暗唱させていたと考えられているこれらの学校において、実は聖書の読解が英語リーディング教育の達成目標であったことは、意外に十分に認識されることがない。聖書が十分に読めることが中等学校入学の必須条件だったのである。聖書の読解は、子供の宗教的素養の証であるとともに、世俗的技能としての英語力の証ともなるものであった。その学習に用いられた入門的な教材は、SPCK などが関与して出された多くの教科書版の聖書物語集であった。聖書物語をテキストとして付した綴字法教科書なども広く用いられた。聖書および子供のための聖書物語集は、イギリス近代の初等英語リーディング教育における規範的教材として、最も広範に、また多様に用いられたものであったと言えるのである。

追記 本稿は成城大学特別研究助成に基づく研究成果の一部である。

注

- 1) 'A Form of a Subscription for a Charity School', in *Educational Charters and Documents 598 to 1909*, [ed.] by Arthur F. Leach (Cambridge, 1911), pp. 539-41.
- 2) James Talbott, *The Christian School-Master; or, the Duty of Those Who Are Employ'd in the Publick Instruction of Children : Especially in Charity-Schools* (London, 1782; 1st edn, 1707). 拙論「初期チャリティー・スクールのリテラリー・カリキュラム——18世紀イギリスにおける'English'という教科の成立」『成城大学短期大学部紀要』34号、2004、1-14頁を見よ。
- 3) たとえば、*International Companion Encyclopedia of Children's Literature*, ed. by Peter Hunt (London, 1996), pp. 267-68などを参照。
- 4) [Richard Allestree], *The Whole Duty of Man* (London, 1658).
- 5) *An Account of Charity-Schools in Great Britain and Ireland*, 12th edn (London, 1713), p. 8.
- 6) J. H. Cardwell, *The Story of a Charity School : Two Centuries of Popular Education in Soho 1699-1899* (London, 1899), pp. 10, 104-05; 'A Brief Account of the Charity School at Horsely-Down in Southwark, March 26. 1728', in *A Sermon Preach'd at Pinner's-Hall, in Broad-Street* (London, 1730), p. 43; *A Sermon Preach'd in Gravel-Lane, Southwark, for the Benefit of a Charity-School There* (London, 1730), p. 42を参照。
- 7) Ruth B. Bottigheimer, *The Bible for Children : From the Age of Gutenberg to the Present* (New Haven, 1996), pp. 43-44を参照。『簡約 旧約・新約聖書物語』は、*A Compendious History of the Old and New Testament, Extracted from the Holy Bible* (3rd edn, London, 1735; 1st edn, 1726)。
- 8) Charles Hoole, *A New Discovery of the Old Art of Teaching Schoole* (London, 1660; repr. Liverpool, 1913), p. 22. 他は引用も含め、Scott Mandelbrote, 'The Bible and Didactic Literature in Early Modern England', in *Didactic Literature in England 1500-1800*, ed. by Natasha Glaisyer and Sara Pennell (Aldershot, 2003), pp. 19-39 (p. 35) を参照。
- 9) Bottigheimer の上掲書、44頁を参照。
- 10) John Locke, *Some Thoughts Concerning Education*, ed. by John W. and Jean S. Yolton (Oxford, 2000), p. 213 (ロック『教育に関する考察』服部知文訳、岩波文庫、1967、246-47頁)。
- 11) 同上書、同上箇所 (邦訳、247-48頁)。
- 12) W. K. Lowther Clarke, *A History of the S. P. C. K* (London,

- 1959), p. 50.
- 13) W. O. B. Allen and Edmund McClure, *Two Hundred Years: The History of the Society for Promoting Christian Knowledge, 1698–1898* (London, 1898), p. 187.
  - 14) [Jean Frédéric Ostervald], *An Abridgment of the History of the Bible* (new edn, London, 1823; 1st edn, [in or before] 1715).
  - 15) Bottigheimer の前掲書、48–49頁を参照。
  - 16) *The Childrens Bible; or, An History of the Holy Scriptures* (Dublin, 1763), microfiche (Haslemere, 1995).
  - 17) 引用を含め、Ian Michael, *The Teaching of English: From the Sixteenth Century to 1870* (Cambridge, 1987), pp. 160, 586, 161, 136 を参照。
  - 18) Francis Fox, *An Introduction to Spelling and Reading* (21st edn, London, 1818; 1st edn, [in or before] 1754).
  - 19) 鶴見の見た版に基づく。Michael の前掲書中の書誌では、「1815 年までに少なくとも22版」とされている。
  - 20) Victor E. Neuburg, *Popular Education in Eighteenth Century England* (London, 1971), pp. 64–65を参照。
  - 21) 引用を含め、Neuburg の同上書、65、58、57頁を参照。
  - 22) [Sarah] Trimmer, *Reflections upon the Education of Children in Charity Schools* (London, 1792), pp. 29–30.
  - 23) Hunter Diack, *In Spite of the Alphabet: A Study of the Teaching of Reading* (London, 1965), p. 11を参照。
  - 24) Cardwell の前掲書、9、75頁、Clarke の前掲書、22頁、および G. S. Chalmers, *Reading Easy 1800–50* (London, 1976), p. 7を参照。
  - 25) 拙論『『教理問答付きABC』の伝統——イギリスのチャリティー・スクールにおける英語綴字教育』『成城イングリッシュモノグラフ』40号、2008、265–87頁を見よ。
  - 26) M. G. Jones, *The Charity School Movement: A Study of Eighteenth Century Puritanism in Action* (Cambridge, 1964), p. 73を参照。
  - 27) John Brinsley, *Ludus Literarius; or, The Grammar Schoole* (London, 1612; repr. Menston, 1968), p. 13. 同書については、拙論「ラテン語文法訳読と母語教育——ジョン・ブリnzリー『ルードゥス・リテラリウス』と17世紀イギリスの英語教育」(『成城文藝』200号、2007、(65)–(79) 頁) を見よ。